

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年8月4日(木)

《信仰生活の中の暗闇は、祝福の始まり ～その中で、<sup>まこと</sup>真の光を探しましょう～》

今日の第一朗読(民数記 20・1 - 13)は、神学的に深い意味のある箇所です。

簡単に説明しますと「神様によって、エジプトの奴隷の生活から解放された人々が、荒れ野に導かれます。そしてその荒れ野の激しさ、難しさに襲われて、神様に文句を言います。『なぜ、エジプトから私たちを導いてくださったのでしょうか。そのままにしておいてくだされば、少なくとも食べるものには困らなかったのに。奴隷であっても、このようなひどいことで悩むことはなかったのに。奴隷の状態のほうがよかった。』』という内容です。

私たちはどうでしょうか。神様を信じるようになって、いろいろ不便なことができたでしょう。責められても返せません。侮辱されても返せません。どんなことがあっても我慢して赦さなければなりません。それらに対して、皆様も不便さを感じる時があると思います。

そして、少し神様を信じ始め、深くなった感じがすると、知らないうちに真っ暗になってしまった自分の心に出会います。その時、「なぜ私はこのように疲れを感じながら生きなければならないのか。神様に出会って、なぜこのような生き方をしなければならないのか。」と思います。そういう時があると思います。しかし、これは靈性的に深いレベルに届いた人が感じるものです。<sup>まこと</sup>真の信仰の靈的な体験のためには、必ず荒れ野が必要なのです。私たちは、その荒れ野には入らずに神様に出会って、最後までたどり着きたくなります。しかしそれは、許されていません。本当に深い世界を体験しようとするれば、必ず暗闇が襲ってきます。痛みが襲ってきます。それを拒んでしまえば、神様がどういふ方であるか絶対に分かりません。

今日の第一朗読で、“エジプトから脱出させられた人々が、感謝の気持ちを表すより、むしろ不平を言った姿”、これは結局、私たち全ての人間の姿ではないかと思います。

今日の福音(マタイ 16・13 - 23)では、イエス様が、ペトロに本当に素晴らしい褒め方をなさいました。しかし、最後には逆に叱っています。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」と。私たちは、どうしても人間的な考え方で生きます。神様のことを思うことができません。それは仕方ないことです。しかし、たまには、自分がしていること、考えていることの基準が何であるか、探ってみる必要があるのではないのでしょうか。少なくとも、『神様を基準として置きたい』という気持だけは忘れないように、いつも意識しなければならないと思います。

もし信仰の生活の中で闇に出会ったら、それは祝福の時間の始まりだと思い、その中で、<sup>まこと</sup>真の光を探してください。

ありがとうございました。